

漆の里から見た 職人の誇り

うるしの里へ

越前鉄道に乗り、福井駅から、元線に乗り換え、鯖江でバスに乗った。漆の里に着ける。交通は一応便利だと思う。私たちは漆の里で絵付と沈金を体験した。



＜先生の指導のもとに リウメンチー撮＞

職人
新聞



人間の営み
と繋がる
越前漆器

＜日常生活に使われる越前漆器
ガオ ワンユン、ウリンボ撮＞

皆さんは学校の食堂で味噌汁を飲む時、艶やかな越前漆器の汁椀をちゃんと見たことがあるのか。越前漆器は漆の美しさがあり、値段が安く使いやすいので、日常生活で人気がある。汁椀のみならず、茶托、お盆、菓子鉢など越前漆器は人間の営みと繋がっている。六世紀という古い時代は越前漆器の歴史の始まりという。日本の漆器産地のうち、最も古いのは越前漆器であるといわれ、一五〇〇年の歴史を持ち、ホテルやレストランなど業務用の食器としての八割のシェアを誇っている。そして、鯖江市は一五〇年前から産地として日本で有名である。

体験が終わった後、絵付け担当の前田先生は熱心に案内してくれた。

越前塗山車

館内最大の越前塗山車は木地製作から、

完成まで、合わせて約三年間をかけた。漆塗り加飾だけで一年間以上かかったそうだ。もうすぐ八十歳になる前田先生は山車の柄を指しながら、「このアユは私が描いたんだよ」と笑顔で紹介してくれた。

山車の上に、人物、動物、風景や祭りなどの柄が生き生きと描かれている。伝統工芸士たちの技の集大成であるこの山車は、値をつけることのできない、地域の「宝」と言えるだろう。



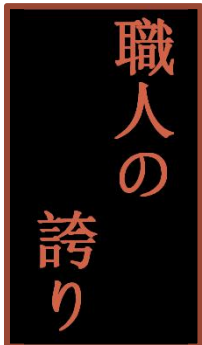
＜山車 ガオ ワンユン撮＞

職人工房

職人工房で、

伝統工芸士による漆器づくりの実演が行なわれ、

蒔絵師の実演は漆器の表面に漆で絵や文様、文字などを描き、金や銀などの金属粉を「蒔く」ことで器面に定着させる技法。丸物の木地製作を担当する清水先生は木地製作について色々紹介してくれた。



作品というより商品であるため、お客様が気に入ってもらえるようにどう実現するかをまた考えなければならぬ。その中、一つだけ変わらないことがある。それは自然こそがテーマであるということだ。展示するものも商品として売られるものも、生き物、風景、日常生活が主に描かれている。

先生たちは愛を作品を作っている。それをわかった私たちは先生の自分の作品への情熱と誇りに感動した。



＜仕事中の清水先生
リウメンチー撮＞

越前漆器の 生産工程

木地製作

木製品は、椀などの丸物か、箱、盆などの角物（板物）と水目桜、トチ、ケヤキなど木材をろくろで削り形をつくる丸物がある。

塗り工程

下塗りと上塗りとに分業化されている。この下塗りは、製品の品質を左右する大切な部分で、塗りと研ぎを何度も繰り返す。

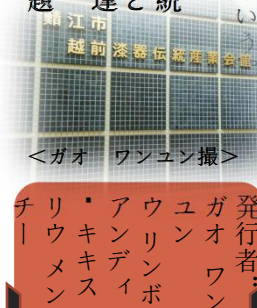
加飾工程

蒔絵は、蒔絵筆に漆を含ませて模様を描き、そこに金・銀粉などを蒔きつけ、研ぎ・磨きを繰り返してつくりあげる。沈金は、沈金刀で線彫り、点彫り等の技法を用いて絵柄を刻み込み、その彫り跡に金・銀箔、金・銀粉、顔料等を漆で定着させ、仕上げていく。

終わりに

先生たちは越前漆器を誇りに思っていると同時に、現代人が機械に依存しすぎることや心を配っていると打ち明けた。機械にはない手作りの柔らかさがあるが、現代の若者は技術を身につけるのに時間がかかるため早く辞める人が多いといっている。

現代において、伝統工芸の未来は一体どこにあるのかは私達が考えなければならない問題である。



＜ガオ ワンユン撮＞
発行者：ガオワン
ウリンボ
アンデイ
キキス
リウメンチー